

南吉童話の闇と光

遠山 光嗣

他者と自分は全く違う意識の世界にいて人間は本質的に孤独であること。自分は自分で思うほど正しくない弱い存在であること。南吉童話には、この人間についての二つの真実を知るという体験が描かれています。そこにある孤独や不安という闇、そして誰もが美しく生きられる可能性という光について考えます。

1. 新美南吉と国民的童話「ごんぎつね」

大正 2 年（0 歳）

7 月 30 日、愛知県知多郡半田町（現半田市）岩滑で畳屋を営む渡辺家に生まれる。本名正八。

大正 6（4 歳）

11 月、母りゑ病没。

大正 8 年（6 歳）

2 月、継母志ん入籍。同月、異母弟益吉生まれる。

大正 10 年（8 歳）

7 月、生母りゑの実家、新美家の養子となるが寂しさに耐えられず、12 月、渡辺家に戻る。

大正 15 年（13 歳）

3 月、半田第二尋常小学校を卒業。4 月、半田中学校に入学。

昭和 2 年（14 歳）

この頃から、童謡や童話を創り始める。

昭和 6 年（18 歳）

3 月、半田中学校卒業。岡崎師範学校を受験するが体格検査で不合格。4 月から 8 月まで半田第二尋常小学校に代用教員として勤務。『赤い鳥』に「南吉」の筆名で童謡童話を投稿。この頃から初恋の女性、木本咸子との交際が始まる。10 月、「ごん狐」の草稿を執筆。年末、巽聖歌を頼って初上京。

昭和 7 年（19 歳）

東京外国語学校英語部文科に入学。

昭和 8 年（20 歳）

北原白秋と鈴木三重吉の訣別により、4 月号を最後に『赤い鳥』への投稿を止め

る。12 月、「手袋を買いに」執筆。

昭和 9 年（21 歳）

初めての咯血をし、一時帰郷。

昭和 10 年（22 歳）

5 月、「でんでんむしのかなしみ」など幼年童話約 30 編を創作。夏、縁談が持ち上がった木本咸子との結婚に踏み切れず別れる。

昭和 11 年（23 歳）

東京外国語学校を卒業し、東京商工会議所内の東京土産品協会に就職。10 月、2 回目の咯血をし、翌月帰郷。

昭和 12 年（24 歳）

病と孤独に苦しむ。ドフトエスキーの作品を読み、人間のエゴイズムと愛について考える。4 月、河和第一尋常高等小学校の代用教員となる。同僚教師の山田梅子と交際。9 月、杉治商会に就職。鴉根山畜禽研究所に住み込みで勤める。

昭和 13 年（25 歳）

4 月、恩師のはからいで安城高等女学校の教諭となり、1 年生を担当する。

昭和 14 年（26 歳）

1 月、中山ちゑとの結婚を考える。2 月から生徒と共に詩集を作る。5 月から「哈爾賓日日新聞」に作品を寄稿する。

昭和 15 年（27 歳）

6 月、中山ちゑ死去。『婦女界』や『新児童文化』に作品を発表し、活躍の場が広がり始める。

昭和 16 年（28 歳）

10 月、初の単行本『良寛物語 手毬と鉢の子』（学習社）を出版。12 月、血尿が出る。

昭和 17 年（29 歳）

1 月、腎臓を患い通院。4 月～5 月、「おじいさんのランプ」「牛をつないだ樺の木」など後期の代表作を次々に書き上げる。10 月、第一童話集『おじいさんのランプ』（有光社）を出版。

昭和 18 年

病状悪化、自宅で療養しながら「狐」「疣」など最期の作品を執筆。3 月 22 日、喉頭結核のため永眠。

- ・教科書教材としての「ごんぎつね」
- ・昭和 31 年に初採用され、昭和 55 年からは全社採用。
- ・これまでに 6000 万人が教室で読む。
- ・数多くの絵本化
- ・海外でも紹介
- ・来年は「ごんぎつね」誕生 80 年

2. 二つのジャンル

- ・「ごんぎつね」は 18 歳、「手袋を買いに」は 20 歳で、共に早い時期の作品。
- ・その後、動物の主人公が人間と関わる童話は書かれなくなる。
- ・安城高等女学校時代になると二つのジャンルに集約されてくる。

	心理描写型	民話的メルヘン	その他
昭 14	「久助君の話」 哈・ラ	「最後の胡弓弾き」 哈	
昭 15	「屁」 哈 「川」 新・ラ		
昭 16	「嘘」 新・ラ		「うた時計」 他・ラ
昭 17	「貧乏な少年の話」 ラ 「耳」 他・牛	「おじいさんのランプ」 ラ 「百姓の足、坊さんの足」 花 「和太郎さんと牛」 花 「花のき村と盗人たち」 花 「牛をつないだ樁の木」 牛 「鳥右エ門諸国をめぐる」 花	「ごんごろ鐘」 ラ 「草」 牛
昭 18	「狐」 牛 「小さい太郎の悲しみ」 牛 「疣」 牛		

哈…『哈爾賓日日新聞』

ラ…『おじいさんのランプ』

花…『花のき村と盗人たち』

新…『新児童文化』

牛…『牛をつないだ樁の木』

他…そのほか

3. 心理描写型

- ・子どもの心の動きを克明に描く。
- ・個性の強い脇役が生き生きと描かれ面白い。
- ・共通の主人公である久助が登場し、「久助もの」と呼ばれる。

何度目かに久助君が上になって兵太郎君を抑えつけたら、もう兵太郎君は抵抗しなかった。二人は、しいんとなってしまった。二町ばかり離れた路を通るらしい車の輪の音が、からからと聞こえて来た。それがはじめて聞いたこの世の物音のように感じられた。その音は、もう夕方になったということを久助君にしらせた。

久助君はふいと寂しくなった。くるいすぎたあとに、いつも感じるさびしさである。もうやめようと思った。だがもしこれで起ちあがって、兵太郎君がベソをかいでいたら、どんなにやりきれぬだろうということを、久助君は痛切に感じた。おかしいことに、取っ組み合いの間中、久助君は、いっぺんも相手の顔を見なかった。

今こうして相手を抑えていながらも、自分の顔は相手の胸の横にすりつけて下を向いているので、やはり、相手の顔は見えていないのである。

兵太郎君は身動きもせず、じっとしている。かなり早い呼吸が久助君の顔に伝わってくる。兵太郎君はいったい何を考えているのだろう。

久助君はちょっと手をゆるめて見た。だが相手はもうその虚に乗じては来ない。久助君は手を放してしまった。それでも相手は立ちなおろうとしない。そこで久助君はついに立ちあがった。すると、兵太郎君もむっくりと起きあがった。

兵太郎君は久助君のすぐ前に立つと、何もいわないで地平線のあたりをややしばらく眺めていた。何ともいえないさびしそうなまなざしで。

久助君はびっくりした。久助君のまえに立っているのは、兵太郎君ではない、見たこともない、さびしい顔つきの少年である。

何ということか、兵太郎君だと思いこんで、こんな知らない少年と、じぶんは、半日くるっていたのである。

久助君は世界がうらがえしになったように感じた。そして、ぼけんとしていた。

いったい、これは誰だろう。じぶんが半日くるっていたこの見知らぬ少年は。…

なんだ、やはり兵太郎君じゃないか。やっぱり相手は、ひごろの仲間の兵太郎君だった。そうわかって久助君はほっとした。

だがそれからの久助君はこう思うようになった。――わたしがよく知っている人間でも、ときにはまるで知らない人間になってしまうことがあるものだ。そして、わたしがよく知っているのがほんとうのその人なのか、わたしの知らないのがほんとうのその人なのか、わかったもんじゃない、と。そしてこれは、久助君にとって、ひとつの新しい悲しみであった。 「久助君の話」

・否定され続けた「久助君の話」

「孤独で神経質で煩悶型の、いわゆる紅顔の少年とはかけはなれた人物」

「子どもの世界にひたることのできぬ、醒めきった少年」

佐藤通雅著『新美南吉童話論－自己放棄者の到達点』（昭和 45・牧書店）

・見直される「久助君の話」

「いま、南吉は新しい。「子どもが孤独〈ひとり〉でいる時間〈とき〉」の内的成長（自分への目覚め）が注目され、南吉が描いた子どもの負の内面・心の屈折が脚光を浴びる時代になったからだ。」

谷悦子「南吉が描く＜子どもの孤独と懷疑＞－幼年期から思春期へ－

『日本児童文学』平成 5 年 3 月（特集：50 年後の新美南吉）所収

小学 5 年生から中学 2 年生までの 800 人を対象にアンケート（谷・昭和 50）

→8 割以上が久助君に共感

4. 民話的メルヘン

- ・郷土および農民たちを詩情ゆたかにえがいている。
登場人物はすべて善人であるが、子どもが主役となることがない。
長い時間の経過で人物の行為を追求するという構成をとっている。
民話的童話文体を確立させた。

浜野卓也著『新美南吉の世界』（昭和 48・新評論社）

- ・戦後、高く評価された民話的メルヘン

「おそらく宮沢賢治につぐ位置をあたえられるべき人」

「新美南吉の本領がストーリー型の作品にあることは、もうおわかりだろうと思います。」
『子どもと文学』（昭和 35・中央公論社）

- ・「心理描写型」作品には否定的

「この「疣」で描いている子どもの空虚感といったものは、児童文学作品の中心主題とするべきものでしょうか。そして、「川」における罪の意識、「かぶと虫」における孤独な感情、「貧乏な少年の話」における劣等感といったものも、どうようです。」
「こういった作品が必要か」
『子どもと文学』（昭和 35・中央公論社）

- ・「百姓の足、坊さんの足」

- ・民話的メルヘンの多くでテーマとなるエゴイズム

「人間の心を筍の皮をはぐようにはいでいって、その芯にエゴイズムがあるということを知る時われわれは生涯の一危機に達する。つまり人というものは皆究極に於いてエゴイストであるということを知るときわれわれは完全な孤独の中につきおとされるからである。」
(昭和 12 年 3 月 1 日の日記)

「しかしここでへたばってはいけない。ここを通りぬけてわれわれは自己犠牲と報いを求めない愛との築設に努めなければならない。こういう試練を経て来た後の愛はいかにこの世をすみよいものとするのであろう。」
(同)

「人間に胃の腑と生殖器がある以上人間がエゴイストであることはやむをえない。人間が悪いのではないのである。」

「人間は皆エゴイストである。常にはどんな美しい假面をかむっていようと、ぎりぎり決着のところではエゴイストである。——ということをよく知っている人間ばかりがこの世を造ったらどんなに美しい世界が出来たろう。自分はエゴイスト

ではない、自分は正義の人間であると信じ込んでいる人間程恐ろしいものはない。
かゝる人間が現代の多くの不幸を造っているのである。」

(共に昭和 12 年 10 月 27 日の日記)

「ほんとうにもものわかった人間は、俺は正しいのだぞというような顔をしてはいないものである。自分は申しわけのない、不正な存在であることを深く意識していて、そのためいくぶん悲しげな色がきっと顔にあらわれているものである。」

(昭和 17 年 4 月 22 日の日記)

- ・人間が本質的に持っているエゴへのこだわり
- ・ではどうすれば？ →自分の弱さ、エゴの深さを自覚して生きる。

5. 現代へのメッセージ

作家として自分の作品世界を確立していった晩年の作品には、

- ・他者と自分は別個の意識の世界にいて人間は本質的に孤独であるということ
 - ・自分は自分で思うほど正しくない、弱くエゴに満ちた存在であるということ
- この二つの、いわば人間についての真実を知るという体験が描かれている。

「私は大げさな絵はかきません。つつましい絵をかきます。つつましい絵の中に半分の夢と半分の現実をつきまぜるのです。」

「私は、蛍を見ると、自分の絵に似ていると思います。蛍をとりまく闇黒を現実にととえるならば、蛍が、それをたよりにして生きている、あのかすかな火は、蛍の夢でなくて何でしょう。世の中に蛍に心をひかれる人があるうちは、私のようなものの描いた絵も、誰かに、静かに愛されてゆくだろうと思うのです……」

絶筆の小説「天狗」

- ・「狐」 平成 11 年絵本化（長野ヒデ子絵・偕成社）
もっと子どもの話を聞き、子どもを向き合うこと
愛されていること、愛していることを感じる（確認する）こと
- ・自分のエゴを深く知ることによって他人を許せる（愛せる）ようになる。
「何でもゆるすこと。何でもうけ入れること。」（昭和 17 年 7 月 4 日・日記）